

# TAMABI NEWS

Tama Art University News Magazine

vol. 97

感性で人の暮らす環境を豊かに快適に

## 多摩美の建築

企業人事・卒業生に聞く

富士通／湖池屋／市原湖畔美術館

環境デザイン学科は2024年4月から  
建築・環境デザイン学科に変わります

環境デザイン学科は2024年4月から  
建築・環境デザイン学科に変わります。



大野美代子の代表作のひとつ「横浜ベイブリッジ」

感性で人の暮らす環境を豊かに快適に

# 多摩美の建築

2024年4月から「環境デザイン学科」が「建築・環境デザイン学科」に変わります。「建築」、「インテリア」、「ランドスケープ」と、人の暮らす環境すべてをデザインする学科としての役割はそのままに、建築の新たなニーズに対応できる力、表現によって新たな価値を生み出す力を身につけられる学科として期待が高まっています。そこで今回は、多摩美術大学の建築をクローズアップします。



撮影：藤塚光政

日常的な視点から公共建築を考えた  
人の生活と共生するデザイン

橋梁デザイナー

大野美代子 [63年デザイン科卒業]

多摩美術大学アートアーカイブセンターでは、3月から大野美代子アーカイブ「ミリからキロまで」資料展が開催されます。1963年に本学デザイン科を卒業した大野美代子は、インテリアデザイナーとしてキャリアを積んだ後、橋梁デザインの分野に活動領域を拡張してきました。出世作の蓮根歩道橋(東京都板橋区)をはじめ、横浜ベイブリッジ(神奈川県)や

鮎の瀬大橋(熊本県)などの名橋を手がけた彼女の仕事は、公共空間に人間の居場所の必要性を明示した、環境デザインにおけるパイオニアワークとして高く評価されています。

大野の作品がいかに革新的で、どのような感性によって生まれていたのか。資料展を監修した、環境デザイン学科教授の湯澤幸子先生にお話をうかがいました。

日本の風景を変えた  
公共デザインに対する使命感

大野美代子について語るうえで、まず言及されるのが、代表作である蓮根歩道橋ではないでしょうか。インテリアデザイナーとして活動していた彼女にとって、橋梁デザインなどの土木に領域を横断していく転機となった作品です。

1977年竣工のその歩道橋で、大野は中央に休憩スペースとなるベンチを置き、通路に点字テープを貼った手すりやスロープを設置しました。社会的弱者の快適性をも包摂した公共デザインは、今でこそめづらしくないかもしれませんが、経済効率を最優先していた当時においては、前例のない発想でした。提案の場で「いったい、誰が利用するのか」と



聞かれ、彼女が「老人、妊婦」と答えると、どっと笑いが起きたというエピソードも残されています。A地点とB地点をいかに効率よくつなぐかが考えられていなかった時代に、大野は公共デザインを社会実装することを志向したのです。この歩道橋を皮切りに、彼女は橋梁・構造工学の優れた業績に対して授与される土木学会田中賞を19回も受賞することになります。



大野が初めて手がけた橋「蓮根歩道橋」。美しい形状と利用者にやさしいデザインなどが同居していた  
(撮影：藤塚光政)

極めて異例だった蓮根歩道橋のデザイン案は、当初は全面的に却下されたといえます。しかし、大野の尊敬すべきところは粘り強さにもあり、何度も会議に足を運び、膨大な量の資料を用意し、協議を重ねることで実現に漕ぎ着けたのです。このようなエピソードはいくつもあり、1986年竣工のかつしかハーブ橋（東京都葛飾区）では、近隣住民2,000名もの署名を集めました。航空法で赤白の縞模様と決められていたタワーの色を、周辺環境に調和したものであってほしいと考え、最終的に白色への変更を実現します。デザインの世界で作家性やコンテンツボラリアートがもてはやされていた20世紀後半に、これらのように匿名的な公共デザ

インに使命感を燃やしていたのも、大野のこっこいいところではないでしょうか。

## 橋梁デザインを支えたインテリアデザイン的な発想

蓮根歩道橋やかつしかハーブ橋の発想を生んだ大野の柔軟な感性は、インテリアデザインによる部分も大きいように思います。本学では、今でいうプロダクトデザインと建築をひとつにしたような学科で学び、住宅家具や照明器具に興味を持って課題をこなしていました。卒業後には百貨店のインテリアデザイン室に勤務し、スイス留学から帰国後、友人とともにデザイン事務所を立ち上げます。土木分野に進出するまでは家具やインテリアに加えて、精神病院や老人病院などケアデザインにも携わっていました。

大野が手がけたインテリアデザインは、モダンな雰囲気を感じさせつつシンプルなのが特徴です。当時からデザイナー家具のような



「かつしかハーブ橋」は、世界初の曲線斜張橋としても知られている  
(撮影：藤塚光政)

方向性は志向せず、例えば日本の食卓事情に合わせたダイニングセットのように、生活者のニーズを追求したミニマルなものばかりでした。重要なのはあくまで生活であり、家



桁と橋脚を滑らかにつないだ構造が特徴の「陣ヶ下高架橋」

具に際立った個性はいらないと考えていたのでしょう。エキセントリックな装飾ではなく生活のリアリティに重きを置いた価値観は、後年の橋梁デザインにも通底しています。

大野を不世出の橋梁デザイナーたらしめたのは、こうした生活者に寄り添った、インテリアデザイン的な発想ではないでしょうか。身体に近いところから空間を想起し、その射程を巨大な構造物にまで広げられるスケール感覚は、彼女の特異な感性です。生活者の視点に立てたから歩道橋に誰もが休めるようベンチを置き、近隣住民の視点を持たたから橋のタワーを美しい色にすることを考えたのででしょう。散策路が延びる桁下空間を豊かにし、自然環境との共生を実現した、2001年竣工の陣ヶ下高架橋（神奈川県）のような作品もあります。広い視座をもって、今日の価値観を先取りしていた大野がどのように本学で学んでいたのか、「ミリからキロまで」では在学中の資料も展示し、彼女のスケール感覚の一端に触れてもらいたいと思います。

1939年、岡山県生まれ。1963年、多摩美術大学デザイン科卒業後、松屋インテリアデザイン室に勤務。1966～68年、スイスのオート・グラウス建築設計事務所にて研修。1971年、エムアンドエムデザイン事務所設立。2016年に逝去。

## ■ 時代を変える美大建築の可能性

### 多摩美で磨かれる個性が、建築の希望になる



内藤 廣 学長

1976年、早稲田大学大学院理工学研究科建設工学専攻修士課程修了（工学修士）。1981年、内藤廣建築設計事務所設立。2001年、東京大学大学院工学系研究科社会基盤工学助教授に就任。翌年、同研究科社会基盤学教授。2010～11年に東京大学副学長を務め、東京大学名誉教授に。2022年より公益社団法人日本デザイン振興会会長。2023年4月に多摩美術大学学長就任。

#### 建築を志す学生にとって多摩美の環境は「宝の山」

近年、画一的で無味乾燥な建築や土木構造物が増え、個人的には物足りなさを感じています。本来重要だったはずの芸術的な側面が抜け落ちているからです。

建築・都市・土木・環境はその時代の文化であり、次の世代に受け渡すメッセージであるべきです。しかし、残念なことに、教育の現場でも画一化が進んでいます。その結果、周りを見渡しても魅力が欠いた建物や土木構造物ばかりが目立つようになってきたのは悲しむべきことです。

建築分野に真に求められているのは、広く文化を吸収し、他者のことを深く理解し、それを現実に落とし込む叡智だと考えています。みなさんに大学で身につけてほしいのは、技術的な習得はもちろんですが、美大なので、何よりも文化を感じ取る感性と他者に対する共感性です。

その点、多摩美では、キャンパス内を少し歩けば、彫刻、絵画、グラフィックアート、プロダクト、工芸など、他の芸術分野やデザイン分野に注力する学生や教員と交流することができます。例えば、ガラスのことに詳しい、陶器についても知って

いる、油画やプロダクトの素養がある、といった独自性がみなさんにあるとしたら、建築家としては大きなアドバンテージになるはずで、これは美大でしか得られない資質です。

私から見れば、建築を志す学生にとっては、まさに「宝の山」の上に住んでいるようなものです。みんなそれを知らずに過ごしているのは、実にもったいないことだと思います。

19世紀末のアーツ・アンド・クラフツ運動は、近代化が進み工業製品が身の回りに溢れることに対する反発から生まれたものです。それが大きな共感を生み、建築と芸術の大きな流れを作りました。

今はDXとAIが身の回りを埋め尽くしつつあります。そんな時代に、建築とは何か、さらには人間とは何か、が再び問われています。私は、この時代の切り口は、身体感覚と物造りの精神だと思っています。多摩美には、新たな時代のアーツ・アンド・クラフツを生み出す道具立てが揃っています。

芸術分野やデザイン分野と建築の学びが融合すれば、他の大学では望めない美大からしか発信し得ない建築教育を生み出すことができると信じています。大学としても学部間の壁を取り払う施策をいくつか模索中です。

時代は大きく変わってゆきます。建築を目指す若者に伝えたいのは、新しい時代の新しい価値観を感じ取り、それに相応しい新しい建築のあり方を模索してほしい、ということです。その手がかりと材料が、皆さんのすぐ近くにある「宝の山」には蠢いています。



「HYPERMIX」 ©DAICI ANO

## 都市の中で息づく、ランドスケープを意識した建築



街をつなぎ、人をつなぎ、  
時間や体験までデザインする

有限会社awn COO / 建築家  
**工藤 徹** [97年建築科卒業]

### 施設と街を接続して、 緩やかなコミュニティを形成

僕はこれまで、主に共同住宅の設計を手がけてきました。なかでも代表的なのが、東京の門前仲町にある複合施設「HYPERMIX」です。前身となるビルのオーナーから「この街に新たな拠点をつくりたい」と相談を受け、二人三脚で設計と運営に携わりました。重視したのは、施設で生まれる収益や付加価値をいかに街に還元するかということです。施設が街にもたらす長期的な影響を見据えつつ、共同住宅、オフィス、飲食店、カラオケ、フィットネスジムなどを併設する複合施設として設計しました。

その街で暮らす人たちがつながるきっかけ

が生まれるようなサードプレイスをつくりたいと、1階には誰でも利用できるカフェを設けました。カフェの外観はガラス張りで、エントランスへと向かう貫通通路が見える仕様になっています。貫通通路は本計画の私有地ではあるのですが、門扉などを設けずに周辺住民も利用できるようにし、施設と街をそのまま接続しました。カフェはその後イベントスペースになりましたが、今も変わらず地域に開かれたコミュニティの場として機能しています。

なんとなく顔見知りができたり、すれ違いざまに挨拶を交わしたりと、緩やかなつながりは安心できる街づくりにもつながります。文筆家で活動家のジェイン・ジェイコブズは、著書『アメリカ大都市の死と生』で、犯罪を



上：「HYPERMIX」と街を接続する貫通通路  
下：仕切りの取り払われたテラスは、住人同士が行き交うコミュニケーションスペースとして機能している

防ぐには「ストリートウォッチャー（街路に向けられる多数の視線）」が重要だと主張しました。その街を歩く住民による見守りが、犯罪の抑止力になるというわけです。

## 住居とオフィスの共存で、 建築の新たな可能性を模索

新たな取り組みとして住居とオフィスをひとつの空間に混在させたことも、「HYPERMIX」の大きな特徴です。一般的に賃貸住居とオフィスは切り離して考えられており、建築基準法でも厳密にその区画が守られています。しかし、住むことと働くことは日常生活でシームレスにつながっていて、必ずしも明確に切り分けられないと僕は考えています。そこで「HYPERMIX」では、法律上の区画区分は設けつつも、オフィスと住居ユニットを分離せず、あえて同フロアに共存させています。合わせて、住む人と働く人の双方が空間と時間を共有できる共用スペースもつくりました。この共用部はリビングのような雰囲気で、オフィス利用者と住民と一緒にコーヒーを飲んだり、ご飯を食べたりする光景が見られます。親しい顔見知りのメンバーによる、コモングの空間です。住居ユニットには、共用部に接する手前側と奥側の部屋を分けられる間仕切りを設けて、共用部との関係を入居者自ら調整できるようにしました。奥側は自分の部屋として施錠しつつ、共用部側は誰でも使える公開ライブラリーとして本を並べている方もいましたね。

このようにプライベート性とコモン性がグラデーションを描く空間デザインは、コミュニティや人間関係の可能性をも広げていきます。例えば、オフィス利用者の方がお子さんを連れてきた際に、共用スペースでオフィス利用者や住民が子どもと遊んでくれたとの話も聞きました。これは自分の子どもじゃなくとも地域の人々で子どもの面倒を見て育てていくという、昔ながらの共同体を再現できた事例だと思えます。

## 住宅の建築設計は、 空間と時間をデザインする仕事

「HYPERMIX」に限らず、住宅の建築設計は、そこで過ごす人々の空間と時間をデザインすることだと考えています。言うならば、時間経過とともに生活者によってつくられていく建築だといえるでしょう。そのため設計段階

では、ある種の余地を残しておくことが不可欠です。アイデアを収束させるよりも、常に可能性を広げていくことを意識しています。

また僕の場合は、学生時代から人間という存在に興味があり、人が見せる正しい部分だけでなく、抑圧されている部分や陰の部分にも目を向けたいと建築の設計ができないのではないかと考えていました。人間そのものを理解しようとする姿勢は、今の仕事にも通じています。学生のみなさんにも、多摩美で多種多様な先生や友人たちと交流しながら、他分野や他者に対する想像力を磨いていってほしいと思います。

1974年千葉県生まれ。1997年多摩美術大学建築科卒業。1997年にarchitecture WORKSHOP（現・有限会社awn）に入社し、2004年より同パートナーとなる。2021年よりawn COO。



左：「HYPERMIX」の断面図 右：オフィスと住居、仕事と生活がシームレスにつながったフロア（©DAICI ANO）

## ■ 賃貸住宅の新たな価値を創出する大東建託との産学共同研究

### 提案したSNS的価値観の企画が商品化され、9棟が販売



吉田智陽さん  
環境デザイン学科4年  
(当時・2023年卒業)

#### 「見せてつながる」という ライフスタイルを提案

大東建託株式会社との産学共同研究に参加し、約半年間にわたって成果発表会に向けた準備にチームで取り組みました。これは、「次世代の賃貸住宅のプロトタイプ」を、次世代の賃貸ユーザーとなる私たち学生とともに開発するというプロジェクトです。建築の成果物として通常は模型や図面となる中、プロジェクトの規模が大きいため実際の建物をつくれる可能性があること、同じ美大にいながほとんど交流がなかった他学科と制作活動ができることに魅力を感じてプロジェクトに参加を決めました。

私たちのチームが提案したのは、「my tag」とい

うSNS的価値観を反映させた賃貸住宅です。住宅内の一部分が外から見えるようになってるのが特徴で、そこに住民の趣味やライフスタイルに関連した空間をつくり出すことによって、ほかの住民と交流するきっかけが生まれる効果を期待しました。企業の方から教わった賃貸住宅の課題のひとつが、隣にどんな人が住んでいるのかわからないということ。そこで、SNSのように互いのキャラクターが伝わるような空間を置くことでコミュニケーションを促し、ポジティブなつながりを築いていける住宅を目指しました。

チーム内ではリーダーを務め、メンバーがフラットに話し合えるような雰囲気づくりを心がけました。環境デザイン学科以外の学生もいたことで各分野の創造性が融合し、アイデアや発表に深みが出たと感じています。

教授や企業の方と真剣にミーティングを重ねるうちに、室内を可視化することへの抵抗感を指摘されることもありました。当然ながら、世代によって価値観のギャップはあります。ただ、だからこそ学生が提案することに価値があると考え、思いを伝えるための工夫を凝らして強い気持ちで発表に臨みました。



4グループの中から選ばれた「my tag」の模型。住人がつながる場所「中庭」は街へと開かれている

#### アイデア実現に向けた プロの技術に学ぶ

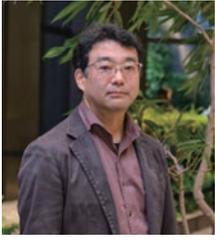
発表会で私たちの考案した賃貸住宅が評価され、商品化されることとなりました。アイデアを実現するには、構造面や法律面など、さまざまな条件を考慮する必要があります。それらをクリアしながら具体化していく企業の技術に触れ、熱意を持って実現の可能性を探ることの大切さを学ぶことができました。企業のブラッシュアップを経て実現した賃貸住宅「VISION MyTAG」は現在、日本全国に9棟建設されることが決まっています。工事中の写真を見せてもらう度に、自分たちの考えた建物の完成が近づいていることを実感して胸を高鳴らせています。



VISION MyTAG

2024年2月16日には、千葉県で完成現場見学会が開かれ、メディアにも取り上げられた

## 人の視点を意識したインテリアデザイン



空間をデザインするうえで重要なのは  
そこにいる人が何を思い、どう感じるか

大成建設株式会社 インテリアデザイン室長  
**高橋洋介** [93年デザイン科卒業]

### 既成概念にとらわれず 心地良いオフィスや病院を追求

私たちが仕事でデザインしている「空間」は、人を中心にできあがっていくものだと考えています。どんな居場所にするのかはもちろん、訪れる人にどんな感情や行動を呼び起こすのかまで考えるのがインテリアデザインの役割です。手がける建築はさまざまで、その用途やコンセプトに応じてホスピタリティを感じられる空間、気分が上がる空間といったデザインに結びつけていきます。

大成建設では、建築計画の段階からインテリアデザイナーとして参画できるため空間の骨格となる提案もできるところが面白いところです。とあるオフィスの設計では、当初端に計画されていた回り階段を空間の中央へ移動。吹き抜けをつくり象徴的な階段とすることを提案しました。最終的に提案は採用され、上下階で働く人たちの往来を増やし、コミュニ

ケーションを活発化する空間づくりを実現できました。合わせて、階段の踊り場スペースはプレゼンなどができる場としても使える仕様にしました。このように「オフィスとはこういうもの」「階段はこういうもの」という既成概念にとらわれないこと、そして見方や発想を変えて物事を捉えることを意識しています。

空間をデザインするうえで大事にしているのは、そこにいる人が何を思い、どう感じるかという視点です。もちろん事前のリサーチは行いますが、前例を参考にするよりも「自分がそこでどう感じるだろう？」と自問自答しながらデザインに落とし込んでいきます。

以前、病院の建築に携わったときには、入院患者さんや家族の視点に立ち、とにかく病院らしさを感じさせないデザインを心がけました。病院と聞いて思い浮かべるような、無機質で画一的で気分が落ち込んでしまうイメージを変えたかったのです。実際に、メディカルトピア草加病院では、青白い蛍光灯の光



上：病院らしさを感じさせない、ホテルのような居心地を追求した「メディカルトピア草加病院」の特設室  
下：「メディカルトピア草加病院」の廊下は、照明や壁面の色、扉の素材なども一から検討している

階段を中央に移動することで吹き抜け空間を生み、プレゼンテーションのステージとするなどさまざまなアクティビティを誘発したオフィス





上:「The Okura Tokyo」宴会場「平安の間」、中:藤棚をイメージしたシャンデリアが特徴の宴会場のエントランス、下:古今和歌集を題材とした壁面装飾のアート試作

を排除し、ホテルを想起する照明や温かみのある素材や色調を採用。病室のベッドから目に入る天井を木調の仕上げとしたり、医療ガスなどの設備を隠せる仕様にするなど、常に患者さんの視点を意識しています。また大部屋のベッドを仕切るカーテンは、それまでパステルカラーしか選べなかったのが、メーカーに呼びかけアースカラーの医療カーテンを開発するなど、前例のない挑戦にも取り組みました。医療行為の気配を消すことに重点を置き、優しく心地よい空間に仕上げました。

### 細部にまでこだわり抜き、 新たに価値を生み出していく

これまで手がけてきた仕事の中でも印象に残っているのが、「The Okura Tokyo (ホテルオークラ東京)」の建て替え計画です。オークラ東京は、まだ日本に西洋式ホテルが流入してきたばかりのころにも関わらず、「海外の模倣ではなく、世界に通じる日本独自のホテルを創造する」をコンセプトに、日本独自の文化や自然の美しさにこだわって建設されていました。昭和の名建築として世界中のクリエイター達から愛され、建て替えに際して反対運動まで起こったプロジェクトでした。

そこで建て替えでは、徹底的な既存調査を裏付けとした「伝統と革新」を開発コンセプトに据え、創建時からの精神と歴史を受け継ぎながらも、より洗練されたデザインを目指しました。現代的な手法を取り入れつつも、昔からの常連のお客様に「これはオークラらしいね」と言ってもらえたらという想いで取り組んでいました。

その中でも私がデザインを担当した「平安の間」を含む和の宴会場では、平安時代の国宝「巻子本古今和歌集の序」を題材とした壁面装飾を新たに制作。日本伝統の網代と光幕を融合させた天井や、藤の花を模した「光の藤棚」、オークラロビーに置かれていた「長方形花台と石草流生花」など和の文化や自然を取り入れ優美かつ品格のある宴会場を創り上げました。創建当時からの伝統装飾の再利用、再現、リデザインを各所にちりばめ、和の伝統美を再構築した空間となっています。

素材の選び方から色の使い方、ディテールにまでこだわり抜いたデザインの設計では、多摩美時代に培われた審美眼が役立っているように感じます。ただ既製品を組み合わせるのではなく、ゼロから新しい意味や価値を生み出そうと思えるのも、美術大学で学んだ経験があるからこそでしょうね。

過去に多摩美の学長も務めていらしゃった高橋士郎先生には、学生時代に「君はデザイン（プランニングや形態、色使い）は大丈夫だから、コンセプトを突き詰めなさい」とご指導いただき、その言葉は今もなお胸に残っていて、自分が仕事において今後も向き合い続けるテーマになっています。これからも妥協することなく、クライアントだけでなく自分自身も納得できるような空間づくりに取り組んでいきたいと考えています。

1969年生まれ。多摩美術大学美術学部デザイン学科卒業、1993年大成建設入社。「ジョン・レノン・ミュージアム」「メディカルトピア草加病院」「The Okura Tokyo」宴会場など、オフィスや病院、ホテル、商業施設などさまざまな用途のインテリアデザインを手がける。

## ■ 身体から想起する多摩美のインテリアデザイン

### 空間を与えられるのではなく、内から空間を捉えて発想を広げる



湯澤幸子先生  
環境デザイン教授

#### より大きなスケールで 本質的なデザインを志向する

私が学生たちへ最初に伝えているのは、インテリアデザインとは単なる室内装飾ではないという考え方です。

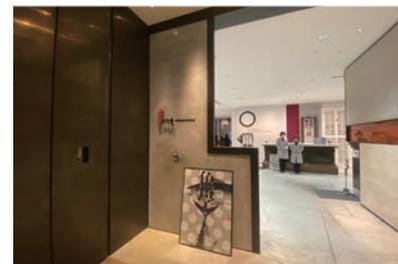
構造物の内部環境をデザインするには、例えば窓や柱の形が重要で、それらは構造物が完成してから考えるのでは間に合いません。人間が空間の中でどのように快適に、よりよく存在しているのか、身体に近いところから空間を想起するのがインテリアデザインなのです。何も無い土地に

構造物を建てる建築デザイン、地球環境や生物多様性など外部環境から考えるランドスケープデザインなど分野はさまざまありますが、これらは空間を考える起点の差異ではありません。皮膚感覚や身体感覚などを駆使して、内側からの発想で空間を捉えるインテリアデザインは、一般的に思われているよりも遥かに大きなスケールを持った分野です。

内から外を考えるのがインテリアデザインであるのだから、私が構造物のプロジェクトに参加するときは、企画段階から携わることが多いです。構造物ができあがってからではなく、そもそも何を創るかという時点で、内側からの発想で意見を出していきます。床を抜いたり、柱を変えたりといった大胆な提案をするには、建築士相手に通用する言葉でないといけません。スケールの大きな構造物へと領域を拡張していきたいという思いから、一級建築士の資格も取得しています。

デザイン・設計を担当したなかには、JPタワー学術文化総合ミュージアム「インターメディアテク」

があります。館内では木材やコンクリートなど、素材をそのまま剥き出しにしました。これが室内装飾のデザインであれば、壁紙で美しく彩るという発想になるでしょう。しかし、私は表面だけを取り繕うことはよしとせず、そのまま本質が見えるように設計しました。学生のみみなさんにもインテリアデザインを正しく志向し、視座を広げていくことを願っています。



東京駅前の商業施設KITTE内にある「インターメディアテク」エントランス

メーカー

## 富士通

世界をリードするDXパートナーとして、テクノロジー・サービスやソリューション、製品などを幅広く提供し、顧客のDX実現を支援する総合エレクトロニクスメーカー、総合ITベンダー。近年はサステナブル事業にも力を入れている。

## 「何が本当の課題なのか」と 深掘りする観察力は 多摩美生が持つ強み



デザインセンター  
プリンシパルデザイナー

**内田弘樹さん**

(96年プロダクトデザイン卒)

私は当社のデザインセンターで、幹部社員として多摩美卒業生の仕事ぶりを見ています。社会課題を解決するというテーマは、多摩美生は在学中から授業課題として取り組んでいるので、これまで学んできたことがそのまま社会で生きるのではないかと思います。例えば「何が課題なのか、これは本当にいいものなのか」と深掘りする観察力は、多摩美生が持つ強みのひとつです。そこから何か新しいものが生まれるんじゃないかと私たちは注目しています。今までとは違うビジネスをつくるには、今までの成功者の真似をしてもダメです。自分なりの気づきを、これまでの型にはめずに、新しい形として生み出す。多摩美卒業生ならきっとそれができると考えていますし、求められているところではないでしょうか。

プロダクトデザインだけではなく「コト」のデザイン＝サービスデザインに対するニーズが高まるなか、社内でもデザインの重要性が年々高まっています。デザインセンターには多摩美の卒業生が15人ほど在籍しており、その半分ほどは幹部社員になっています。当社のビジネスに影響を与える立場にいますので、これからもデザインの価値がどんどん上がっていくと思っています。



デザインセンター ビジネスデザイン部  
デザイナー/人間中心設計専門家

**富士聡子さん**

(05年情報デザイン卒)

ヘルスケアが抱える社会課題の解決を目指す取り組みのひとつとして、かかりつけの医療機関が持つ診療データを患者本人が自分のスマートフォンで閲覧することができ、また、患者本人の同意のもと、その診療データを複数の医療機関に共有することができるサービスアプリ「ポータルカルテ」のUX/UIデザインを担当しています。

個人の診療データはデリケートな情報なので、どうやったら安心して使ってもらえるかということに注力し、試行錯誤を重ねました。現在は札幌医科大学附属病院で稼働し、実際の患者さんに利用いただいているところです。医師や患者さんからのフィードバックを受けながら、繰り返し改善しています。まずは道内の病院間でデータ連携するところから、徐々にこのアプリの導入を全国拡大していけたら。「社会を良くするための仕事」という点で、すごくやりがいを感じています。

学生時代に培われた観察力という点では、大学2年のデザイン・サー

ベイという授業で京王線橋本駅の売店の店員さんの朝のラッシュ時の動き方をリサーチし、どうやってテキパキとさばっているのか、迅速な販売と丁寧な接客について、気づいた点をまとめてレポートにしたところ、先生にすごく褒められたことがありました。

当時は「美大ってカッコいいデザインを学ぶところじゃない!?」と思っていたのですが、そのとき先生がお話してくださった、「デザインというのは、人と人、人とモノ、人と社会の関係、ものごとの仕組みを設計すること」という言葉がとても印象的で、今も心に深く残っています。多摩美の4年間でインストールされた「プロセス全体をデザインする」ということが、今の仕事にそのままつながっています。



デザインセンター ビジネスデザイン部  
aerukamoプロダクトマネージャー

**木内美菜子さん**

(08年情報デザイン卒)

Webやパソコン、スマホのアプリのUX/UIデザインを担当し、その後、展示会で使用するデジタルサイネージのデザインやビジュアルに関わる仕事に携わりました。現在はプロダクトマネージャーとして、サービスの成長戦略に重点を置いて検討することが増えてきています。

「aerukamo (アエルカモ)」という当社独自のサービスには、有志でプロジェクトを立ち上げた2021年から携わっています。コロナ禍以降、会社全体がテレワーク主体の働き方に移行したことで、社員同士が社内で会うことが珍しくなり、若手社員が「同僚や同期を探すためのサービスをつくりたい!」とデザインセンターに相談しに来たことがきっかけで生まれたサービスです。

アプリでは、社員の出勤情報を一覧で見ることができます。サービスのコンセプトを言語化してまとめ上げるところから、どういう体験フローを描けば社員にとって使いたいものになるか、使い続けてもらうにはどういう工夫をすればいいか、仕様を検討するだけでなく、社内でのブランディングや広報、認知度アップなどの一連の活動も、プロジェクトメンバーと考えながら進めました。

学生時代から「サービスをつくりたい」という気持ちが強く、多摩美ではサービスデザインの授業を全部取っていました。なかでも1年生のときに会った講師の先生には、審美性や考え方の面で大きな影響を受けました。「お前のデザインが一番サイ!」と言われたこともあるの



ですが(笑)、社会人になると、そうやってしっかりと叱ってくれる人はいません。成長するのも停滞するのも後退するのも自分次第というところが、学生と社会人との違いだと感じています。



多摩美出身者は、ビジネスの最前線からどのような評価を受けているのでしょうか。また、その卒業生たちが学んだ多摩美での4年間は、ビジネスの現場でどう生かされているのでしょうか。さまざまな業界で活躍する企業人たちに尋ねました。

本記事は連載企画です。さらに詳しい内容や他企業情報はWebでご覧になれます。



メーカー

## 湖池屋

1967年に日本で初めてポテトチップスの量産化に成功した総合スナックメーカー。2016年のコーポレートブランド再編後、2017年に発売した「湖池屋プライドポテト」が大きな反響を呼んだ。近年はスナックの枠組みを超えた食領域にチャレンジしている。

### 「湖池屋プライドポテト」など メインブランドの パッケージデザインに携わる



人事総務本部 人事部  
人財マネジメント課  
齋藤 櫻さん

当社では現在、美大卒の社員の多くがマーケティング部でデザイナーやマーケター職に従事しています。入社後から数年でメインブランドのパッケージデザインを担当するなど、即戦力として第一線で活躍する人が増えてきており、これも美大生の特性のひとつだと感じています。

いろんな人を巻き込んで商品づくりを推進していくマーケティング部において、自分の意見をしっかりと持ち、自分の言葉で述べることで、課題発見から提案までをセットで、ときにはビジュアルで提示することができるのは、多摩美卒業生の大きな強みではないでしょうか。自ら動く主体性と、自分の頭のなかにある考えを表現できる力は、当社の全ての業務で求められています。



マーケティング本部 マーケティング部  
グローバルデザイン室  
田中美羽さん  
(22年グラフィックデザイン卒)

現在は「湖池屋プライドポテト」「スコーン」などのブランドを担当しています。パッケージのみではなく、商品企画から販促用のPOP、ポスター、ウェブサイト、CMなどのコミュニケーションデザインにも一貫して携わっています。どういものがお客様に求められるのか、トレンドの変化を見ながら、味もデザインももっと良くできないかと日々模索しています。

新しい意見やアイデアをどんどん商品化していこうという風潮は社内でも年々高まっていて、入社してすぐに開催された高知の酒造メーカー「酔鯨」とのコラボ商品の社内デザインコンペではデザインが採用され、オンライン限定商品として販売されました。そこでひとつの商品をつくるために多くの人に関わっていることを知り、デザインにもさまざまな考え方や視点が必要だと実感しました。

多摩美で大貫卓也教授から教わった「社会の課題をデザインで、アートディレクションで解決する」ということは、今も常に私の頭の片隅にあり



ます。時代とともに人々の生活様式がさまざまに変化するなかで、スナック菓子が単なる嗜好品としてだけでなく、生活のなかで何を解決できるか、何かを変えるきっかけになれるか、意識するようになっていっています。

公共施設

## 市原湖畔美術館

(指定管理者：アートフロントギャラリー)

千葉県一の貯水面積を誇る高滝湖を望む自然豊かなロケーションを活かし、アートだけでなくさまざまなアクティビティを屋内外で楽しめる「首都圏のオアシス」を目指す。

### アーティストが活躍できる 環境づくりのために 新たなエネルギーを注ぐ



館長代理  
前田 礼さん

当館は「世界をどう把握するか」というテーマを背景にした企画や、海外アーティストの招聘および文化機関との協働による国際性を持った企画、新しい表現やアートの提示を試みた企画など、5つのコンセプトをもとに展覧会やイベントを開催しています。

戸谷さんは若手の作家をすごくよく見ていて、「彼らと一緒に展覧会やイベントをやりたい、彼らに光が当たる場をつくって応援したい」という気持ちが非常に強い。また、物怖じせずに企画を提出する姿勢も素晴らしいですね。これまでアートがなかった場所にアートを築き、その可能性を広げ、アーティストが活躍できる環境をつくり上げていくという私たちの指針に、新たなエネルギーを注いでくれています。



学芸員  
戸谷莉維縋さん  
(21年芸術学科卒)

企画段階から実施まで関わった最初の展覧会は、当館の10周年記念として開催した「湖の秘密—川は湖になった」展です。8人のアーティストたちが美術館内外の空間に作品を制作し、私は作品づくりのリサーチや制作のサポートなども担わせていただきました。作品に用いる素材を探したり、湖の底にある5トンもの土をボランティアの方とともに運び出し、近隣の体育館に広げて乾燥させた後、当館地下の展示室まで運んだり。一般的な学芸員のイメージからはかけ離れているかもしれませんが、作家に寄り添って伴走しつつ、裏方に徹する学芸員でありたいと思っています。

この思いの原点にあるのが、学生時代に所属していた家村珠代先生(芸術学科教授)の展覧会設計ゼミでの経験です。作家と学生が協働して1年間かけて展覧会をゼロからつくり上げるのですが、作品をどう見せたら面白いのか、展示の構想を具体化するために日々議論を重ねて制作する過程をととても楽しく感じたことが、その後の進路選択につながりました。自分がアンテナを張って注目した作家と関わり、協働を通して思いを共有し、ともに展覧会をつくり上げること、そしてお客様の姿を目にできることに、大きなやりがいを感じます。



## 日本タイポグラフィ年鑑2024で本学卒業生がグランプリ・学生グランプリをダブル受賞

「日本タイポグラフィ年鑑2024」の受賞者が発表され、17年大学院グラフィックデザイン修了・深沢夏菜さんがグランプリ、23年同修了・李敏楽さんが学生賞グランプリを受賞。一般・学生の両部門で本学卒業生がグランプリを受賞する快挙となりました。日本タイポグラフィ年鑑は、さまざまなコミュニケーションで必要とされるタイポグラフィ・デザインの巧みな姿を収録した、海外でも評価の高い記録誌。国内外から多くの作品が寄せられ、審査委員と前年度のグランプリ受賞者による厳正な審査を経て、全出品作品の中からグランプリや部門ごとのベストワーク賞、審査委員賞が授与されます。ほかにも大学院情報デザイン2年・厲万千さんが学生部門でベストワーク賞を受賞。2024年4月に東京品川にて授賞式が開催される予定です。



深沢夏菜さんの作品『A Mountain of History』



李敏楽さんの作品『書物について (彫刻・書写・印刷)』

## 若手クリエイターを対象とした中国のアニメーションアワードで修了生が最高賞を受賞

中国のアニメやマンガ、ゲームなどのエンターテインメント動画共有サービスbilibili（ビリビリ）が主催する、若手クリエイターを対象としたアニメーションアワード「第五屆哔哩哔哩寻光计划小宇宙奖」で、23年大学院グラフィックデザイン修了・リンジュンケンさんの『夜猫』が最高賞の金賞を受賞。また、同修了のキョウガンさんの『Sewing Love』も実験的かつ前衛的な感覚を持つアニメーション作品に贈られる一種很新的東西賞を受賞しました。bilibiliは10代から20代のZ世代に人気のコンテンツを集めたエンターテインメントプラットフォームで、日本やアジア各国でも利用されています。



リンジュンケンさんの最高賞受賞作品『夜猫』

## 第44期国際瀧富士美術賞（2023年）で彫刻学科の学生が優秀賞を受賞

パブリックアートの振興とこれからのパブリックアートを担う若手芸術家の育成を目的に開催される「第44期国際瀧富士美術賞」で、彫刻4年・藤田野々さんの『border』が優秀賞を受賞しました。同賞は公益財団法人日本交通文化協会により、奨学金制度「瀧富士美術賞」として1980年に創設。91年には対象を国外の美術・芸術系の学部を有する大学にも広げ「国際瀧富士美術賞」と改称。現在の対象校は国内13校、海外7カ国12校となり、2023年までの44年間に計868人の学生が同奨学金を受けて美術・芸術のさらなる研究、制作活動に励んでいます。2023年11月15日には都内で授賞式が行われ、奨学金と賞状が贈呈されました。



藤田野々『border』

## 「日本パッケージデザイン学生賞2023」で学生が多数受賞、入選

パッケージデザインに興味のある学生を対象として2022年に新設された「日本パッケージデザイン学生賞2023」にて、統合デザイン3年・井原花奈さんが審査員特別賞 森孝幹賞を受賞。同3年・石川千夏さんが審査員特別賞 渡辺有史賞を受賞し、ほか多数の学生が入選を果たしました。同賞は公益社団法人日本パッケージデザイン協会（略称：JPDA）により、パッケージデザインの新しい魅力と価値を学生と共に発掘・伝播していくことを目的として新設されたアワード。第2回開催となる2023年は、「ひらく」をテーマとして作品が募集されました。入賞作品は『年鑑日本のパッケージデザイン』（隔年刊行）に収録される予定です。



井原花奈『米』

## 新進作家のための公募コンクール「FACE2024」で総勢10名の学生・卒業生が受賞・入選

新進作家の動向を反映する「FACE2024」の受賞・入選者が発表され、03年大学院油画修了・六無さんが読売新聞社賞、大学院油画2年・東菜々美さんが審査員特別賞を受賞するなど、総勢10名の学生・卒業生が受賞・入選を果たしました。SOMPO美術財団と読売新聞社が主催するこのコンクールは今年で12回目の開催となります。「年齢・所属を問わず、真に力がある作品」を公募するもので、今年は全国から1,184名（※応募は一人一作品）の応募がありました。五次の「入選審査」と二次の「賞審査」を経て、国際的に通用する可能性を秘めた入選作品78点（内受賞作品9点）が選出されました。



六無『狩猫図』

## 伊藤薫朔賞・本賞を卒業生が共同受賞



左：受賞の様子、右：南屋武広さん（カメラマン：前田昭二）

2022年度第50回伊藤薫朔賞・本賞を90年グラフィックデザイン卒業・南屋武広さんが共同受賞しました。同賞は特定非営利活動法人日本テレビ美術家協会によりテレビ美術の作品及び功績者を顕彰するもの。対象となったのは、NHKで2022年に放送された土曜ドラマ『探偵ロマンス』の美術セット。ストーリーの独特な世界観を配色と緻密なデザイン設計で表現したことが評価されました。

## ゲームアイデアのコンテストで、情報デザイン4年生がグランプリを受賞

マーブル株式会社主催する「ゲームアイデアコンテスト2023」において、情報デザイン4年・樋田航也さん（「必須アミノ」名義）の作品『Ice Fishing』がグランプリを受賞。賞金30万円を獲得しました。審査委員長からも「面白そうで、実際に面白い」という、ゲームに必要な条件を十分に満たしていたと高評価。ゲームクリエイターという新たなジャンルで多摩美術大学の存在感を示しました。



樋田航也さんの作品『Ice Fishing』

## 在学生の作品が映画祭でヤング部門優秀賞を受賞

自主制作映画に特化した「神戸インディペンデント映画祭2023」で、メディア芸術2年・寶川嘉哉さんが監督を務め、渡辺介偉さん、義仲爽太さん、島遥七さん、西久保哲志さん、吉村衣吹さん（いずれもメディア芸術2年）と共に制作したホラーコメディ作品『鮫品』が、ヤング部門優秀賞を受賞しました。入選作品は神戸市の新開地アートひろばで開催された同映画祭で上映され、各賞が授与されました。



『鮫品』メインビジュアル

## テキスタイルデザイン卒業生が準グランプリを受賞

23年テキスタイルデザイン卒業・池部ヒロトさんが、ファッションデザインの可能性を拡張するアワードとエデュケーションの一体型プログラム「FASHION FRONTIER PROGRAM 2023」にて準グランプリを受賞しました。池部さんは卒業後、2023年度グッドデザイン・ニューホープ賞に入選するなど精力的に活躍しています。



池部ヒロト『MAYUGOMORI』Photography by YASUNARI KIKUMA @FASHIONFRONTIERPROGRAM

## 卒業生の伊東ケイスケさんがメタバース部門の銅賞を受賞

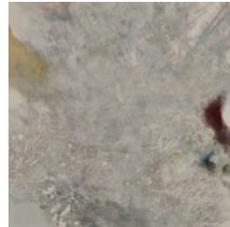
VRアーティスト10年のグラフィックデザイン卒業・伊東ケイスケさんが監督したVR演劇『Typeman』が、「日テレマジナリウムアワード2023」でメタバース部門の銅賞を受賞しました。同アワードは、日本テレビ放送網株式会社が開局70年を記念して、メディアテクノロジーによる作品を公募したもの。同作品は、第79回ベネチア国際映画祭クロスリアリティ（XR）部門にもノミネートされています。



伊東ケイスケ監督のVR演劇『Typeman』

## 「Seed 山種美術館 日本画アワード2024」で奨励賞を受賞

日本画の新たな創造に努める優秀な画家の発掘と育成を目指す公募展「Seed 山種美術館 日本画アワード2024 未来をにう日本画新世代」にて、12年大学院日本画修了・小谷里奈さんが奨励賞を受賞しました。また、11年同修了・清水航さん、19年同修了・田澤苑実さん（日本画専攻助手）、23年同修了・林銘君さんがそれぞれ入選を果たしています。同賞は2016年に山種美術館の創立50周年を記念して新たにスタートした公募展です。



小谷里奈『向こうの姿』2023（令和5）年

## 「LIFE×DESIGNアワード」で「ベストサスティナビリティ賞」を受賞



スガイワールドの製品『袋留めクリップ BO』

04年情報デザイン卒業・須貝悠さんが代表を務める株式会社スガイワールドの製品『袋留めクリップBO（ポー）』が、LIFE×DESIGNアワードで、「ベストサスティナビリティ賞」を受賞しました。同賞は、商品開発やものづくりにおいて、地球環境保護の視点や持続可能性に貢献している商品に授与されるもので、SDGsが何かと話題になる昨今の社会において、ますます注目を集めそうです。

## 「TERRADA ART AWARD 2023」ファイナリストに選出

寺田倉庫株式会社が開催する「TERRADA ART AWARD 2023」のファイナリストに、09年大学院情報デザイン修了・やんツーさんが選出されました。同アワードは、新進アーティストの支援を目的とした現代アートの賞。2024年1月10日から28日には、寺田倉庫イベントスペースでファイナリスト展が開催され、会期初日に審査員賞の授賞式が行われ、やんツーさんは寺瀬由紀賞を受賞しました。



「Great Emptiness」Artwork by yang02, Photo by Yusuke Suzuki (USKfoto)

## 「第1回BUG Art Award」ファイナリストに選出

18年大学院油画修了・近藤拓丸さんが「第1回BUG Art Award」のファイナリストに選出されました。これは、株式会社リクルートホールディングスが運営する制作活動年数10年以下のアーティストを対象としたアワードで、受賞者は、審査員からのフィードバックや展示・設営に関するサポートを受けられます。近藤さんの作品は、「第1回BUG Art Award ファイナリスト展」で展示されました。



第1回BUG Art Awardファイナリスト展 展示風景（撮影：雷田了平）

## アートとデザインを越境し、新たな価値を提案する 全学科横断型コンペ「TUB showing 2023」展を開催

2023年12月4日から24日まで、多摩美術大学TUB（東京ミッドタウン・デザインハブ内）で、アートとデザインの領域を越境した、美術大学である本学ならではの公募制の企画展「TUB showing 2023」展を開催しました。本賞は初めての学内全学科横断型の公募制コンペティション企画で、今回のテーマは「Re-〇〇〇」。審査を通過したファインアート系、デザイン系の学部生、大学院生が出品した49作品を一堂に展示。各作品の共通テーマの解釈の仕方とデザインとアートの作品アプローチの違いを鑑賞しながら、未来のクリエイティビティの可能性を探りました。12月10日には会場内で学内教員4名による審査会が行われ、大賞、優秀賞、審査員賞等の各賞が発表に。授賞式後、審査員の教員と参加学生たちによる交流会が行われました。



〈大賞〉大学院彫刻1年YANG ZHUOさんの作品「權」(共通テーマ: Re-cycle)



〈優秀賞〉studio JACA (多摩美術大学ジャンベ部所属有志) の作品「tama boogie-woogie」(共通テーマ: Re-session)

## 未来を見据えた循環型社会を探究するプログラムの シリーズ第二弾、第三弾を開催

多摩美術大学サーキュラーオフィスレクチャーシリーズは、未来を見据えた循環型社会を探究するプログラム。2023年12月20日に上野毛キャンパスで開催した第二弾のテーマは「トキとアートと政策とデザイン」。佐渡島におけるトキの放鳥プロジェクトに関わる大正大学地域構想研究所の岩浅有記准教授から「地域創生と地域環境政策はどちらも欠けてはならない両輪」と捉えることの重要性が語られました。2024年1月14日に八王子キャンパスで開催した第三弾のテーマは「『循環する拾得物』～なおすことでしか見えない眺め」。美術家の青野文昭氏を講師に迎え、「なおすこと」「修復すること」の意義や価値に着目した講義が展開されました。



第三弾の様子。  
青野文昭氏(左)と聞き手の彫刻学科  
木村剛士准教授(右)

## 多摩美生限定! ゲームからお菓子メーカーまで、 業界や働き方を知る合同説明会を開催

2024年1月23日、八王子キャンパスのアートテークで多摩美大生限定の合同企業説明会が開催されました。学部3年生・大学院1年生(令和7年3月卒業・修了予定者)を対象にした同説明会には、ゲーム、コンサルティング、メーカー、情報・出版、行政機関など多分野から多摩美大生を積極的に採用したいとする企業・団体21社が参加。人事担当者から会社概要や業務内容、採用スケジュールの説明などが行われたほか、本学のOB・OG社員が自らの学生時代の就職活動、現在の業務内容を説明する場面もありました。働き方の多様化によって、学生一人ひとりが自身のキャリアを考えることがより一層大切となるなか、参加した学生たちは真剣に耳を傾けていました。



企業説明会の様子

## 樋口真嗣監督が特撮の歴史から技術まで 幅広く語る特別講義「特撮の魂」を開催



ユーモアを交えて講義を行う樋口真嗣監督

2023年12月4日、八王子キャンパスレクチャーホールで特撮映画・アニメーションの第一人者である樋口真嗣監督を招いた特別講義「特撮の魂」を開催しました。日本における特撮作品の歴史年表から始まり、特殊撮影が生まれた背景や特撮技術の時代ごとの発展、特撮映画の政治的・社会的な役割などが、多くの参考映像とともに紹介

されました。また、日本初の特撮怪獣映画『ゴジラ』の誕生から第一次怪獣ブーム・第二次怪獣ブームの到来から衰退に至った経緯、年代ごとの立役者や関係企業、さらには『STAR WARS』や『ターミネーター』といったアメリカ映画がもたらした特撮技術の発明や応用なども説明され、大いに盛り上がりました。

## テキスタイル専攻の学生が宮本亜門さん演出の オペラ『午後の曳航』のマスク製作に挑戦

三島由紀夫の同名小説を原作とし、宮本亜門さんが演出を務めたオペラ『午後の曳航』が、2023年11月23日から26日まで東京・日生劇場で上演されました。この舞台で、物語の重要な役割を担う登場人物である少年たちが被るマスク製作プロジェクトに、テキスタイルデザイン専攻1年の学生44名が挑戦しました。学生たちは、公演前日の11月22日のゲネプロ(衣裳付き最終稽古)で初めて自身が製作したマスクを演者が身につけて演技する様子を見学。本プロジェクトでオペラの原作や演出に触れ、実際の舞台で使用されるマスクを



製作するという実践的取り組みを通じて、演技や演目を引き立てる舞台衣裳の重要性を学ぶ貴重な機会となりました。

ビニール袋や紙袋などの廃材を利用してつくるといふ芝居の設定に合わせてマスクを製作

## 多摩美術大学と日本郵船による 共同研究成果発表を実施

2024年1月22日、多摩美術大学と日本郵船株式会社の共同研究「次世代の循環型社会に適応するプロダクトデザイン『KRAFT & LOOP ~船員のウェアデザイン~』」の最終成果発表が行われました。日々船員が着用するユニフォームのデザイン、船員同士のコミュニケーションを促進するアプリケーションなどが提案され、共同研究で生まれたユニフォームは、実用に向けて進展させる計画が進んでいます。



共同研究最終発表会の様子

## 子育ての未来を豊かにする 提案の最終成果発表会

2024年1月30日、多摩美術大学TUBにて、ベビー用品ブランド『10mois（ディモワ）』の商品企画開発を手がける有限会社フィセルとのPBL科目\*として開講した「0~3歳児の衣食住にちなむデザイン提案」の最終成果発表会が開催されました。約50名の学生が学科・学年を越えた混成チームを組み、育児にまつわるモノトを次世代の視点から捉え直すことを目指した研究発表を行いました。



最終成果発表会のプレゼンテーションの様子

\*PBL科目：全学科、全学年の学生が横断的に履修できるプロジェクト型の学習形態

## ニコンと共創する 「未来を見据えたデザイン」

株式会社ニコン デザインセンターのUX、プロダクト、UIそれぞれを専門とするインハウスデザイナーと、生産デザイン学科プロダクトデザイン専攻の学部生/院生/研究生総勢10名が、「Human-Machine Co-creation」というテーマのもと、デザインを提案する産学連携プロジェクトを実施。約3か月にわたる対話を通じて、これからのデザイナーに必要な新たな価値創造を学ぶ貴重な経験となりました。



## プロダクトデザイン3年生が 企業47社に公開プレゼンを開催

2023年11月21日、東京デザインセンターガレリアホールにて、プロダクトデザイン3年生による公開プレゼンテーションが開催されました。計19名の学生が、自動車、家電、化粧品メーカーなど47社のデザイン部門担当者の前で、課題で制作した製品の構想を発表。コンセプトは「膨らむ想い」。車内置き去りを防止する幼稚園送迎バスなど、日常をより豊かにするさまざまなアイデアが提案されました。



東京デザインセンターガレリアホールにて公開プレゼンテーションの様子

## テキスタイルデザイン専攻3・4年生が ファッションショーを開催

2023年11月30日、八王子キャンパスメディアホールで、テキスタイルデザイン専攻STUDIO02の3・4年生合同ウォーキングプレゼンテーション（ファッションショー）が行われました。「STUDIO02 ファッションテキスタイル」は、「身体」に関わるテキスタイルデザインを学ぶ専門領域。3年生13名と4年生9名、総勢22名の次世代を創るクリエイターの作品がランウェイを彩りました。



ウォーキングプレゼンテーションの様子

## TOPPANと「愛着」をテーマに デザイン戦略を共同研究



学生による空間演出企画

統合デザイン学科の学生11名が、TOPPAN株式会社と「空間や環境を構成する建築材に関するデザイン戦略の構築と企画・デザイン開発」の共同研究を行いました。2024年1月11日に上野毛キャンパスで行われた成果発表では、「愛着」をテーマに、仮想空間「学生のためのシェアハウス」の空間演出企画を発表。社会ニーズを捉え、デザインに落とし込むことの重要性を学ぶ貴重な経験となりました。

## 八王子市長選で学生が 「投票済証」をデザイン



「辰」の漢字を表現した6種類のデザイン

2024年1月に行われた八王子市長選挙で、多摩美術大学の学生がデザインした「投票済証」が配布されました。投票済証は、投票を済ませたことを選挙管理委員会が証明する書類。イラストは6パターンを用意。投票所ごとに異なる色の投票済証を用意し、希望者に配布しました。学生が投票済証のデザインを手がけるのは、2023年4月に行われた八王子市議会議員選挙以来2回目となります。

## メルセデス・ベンツ アート・スコープ のワークショップを学内で開催

本学がパートナーとして参画しているメルセデス・ベンツ日本株式会社文化・芸術支援活動「メルセデス・ベンツ アート・スコープ 2022-2024」のアーティスト2名が決定しました。ドイツへの派遣作家・笹岡由梨子氏による「アートと労働」をテーマとした特別講義&ワークショップを2023年11月に八王子キャンパスにて開催、同12月には本学学生が考案した5つの物語をもとに映像作品を制作しました。



左から：笹岡由梨子氏、アニカ・カース氏

## 任命

副学長  
小泉俊己  
深澤直人

### 学長補佐

石田尚志  
佐竹邦子  
安次富隆  
湯澤幸子  
加納豊美  
佐藤達郎  
(以上2024年1月1日付)  
※ただし、2025年3月31日  
までとする

## 訃報

奥田博伸 技術講師

2023年10月5日  
逝去 44歳

藤森泰司 非常勤講師

2009年～  
非常勤講師  
2023年12月8日  
逝去 56歳

謹んでお悔やみ申し上げ、  
ご冥福をお祈りいたします。

## 多摩美術大学 TUB



「まじわる・うみだす・ひらく」をコンセプトに、オープンインベーションによる価値の創出、幅広い層に向けたデザインやアートプログラムの提供、学生作品の展示・発信を通してデザインとアートの持つ創造性と美意識を社会とつなぐ場を提供しています。

港区赤坂9-7-1ミッドタウン・タワー5F(東京ミッドタウン・デザインハブ内) | 11:00~18:00 | 日曜・月曜・祝日休場 | 入場無料

### 3/28(木)~4/6(土)

#### 「ポケモンと考える アート・環境教育展2」

「ポケモンと考える アート・環境教育展2」を六本木東京ミッドタウンTUBにて開催いたします。会場には生産デザイン学科プロダクト専攻Studio3の学生たちが身の回りのものから作ったポケモンが50体以上並び、サステナブルな社会に向けての、環境問題についての情報も展示されます。期間中2日間、小学生を対象としたワークショップも行われます。



### 5/23(木)~6/2(日)

#### 「すてるデザイン~サーキュラーな社会に向けての布石」展

GOOD DESIGN MARUNOUCHIにて、「すてるデザイン~サーキュラーな社会に向けての布石」展を開催いたします。[すてるデザイン]がこれまで取り組んできた身近な廃棄物の有効活用方法、新たな循環システムなど、多角的な視点での研究やデザイン提案をご紹介します。アイデア溢れる提案を覗いていただき、この先の未来に対して一緒に考える機会とできれば幸いです。



## Up & Coming



### UP & COMING

Up & Comingは卒業生の発表活動を支援し、新しい表現を発信するオルタナティブ・スペースです。アキバタマビ21として運営していたスペースを外苑前に移転し、2024年4月から名称を新たに再出発します。アーティストの自己プロデュースによる企画展によって、多くの人びとへ創造のよろこびを伝え、新たな時代精神を生み出す場となることを目指しています。渋谷区神宮前3-42-18 | 12:00~19:00(金曜・土曜は20:00まで) | 火曜休場 | 入場無料

### 4/6(土)~5/12(日)

#### 合図

「今まで作品を見る場所ではなかった場所が、これから作品を見る場所になる」というスタートの合図を送る展覧会です。

参加作家=大石一貴、齋藤春佳、張小船Boat ZHANG 齋藤春佳(参考作品)



## 多摩美術大学 アートアーカイヴセンター



本学に蓄積されてきた芸術資源を保存・管理・公開していく研究教育拠点として、2018年4月に設立されました。現在18の資料体を有し、授業での利用や、学生のみなさんの制作や研究に役立てていただける生きた教材とするため、各種資料を整理してアーカイヴを構築しながら公開しています。アートアーカイヴセンターウェブサイトでの利用方法のほか動画などのコンテンツもご覧ください。

### 4/3(水)~5/11(土)

多摩美術大学アートアーカイヴセンター所蔵資料展4

#### 大野美代子アーカイヴ 「ミリからキロまで」資料展

大野美代子(1939-2016)は、横浜ベイブリッジなど名橋をデザインし数々の賞を受賞した橋梁デザイナーです。1963年に本学デザイン科を卒業後、インテリアデザイナーを経て、土木分野へと仕事の領域を拡大していきました。2021年度に、本学、東京大学、法政大学との共同研究による展示が行われました。本展は、同研究所蔵資料展となります。

会場：アートテーク2F アートアーカイヴセンターギャラリー

10:00~17:00 | 日曜日、5/1(水)~5/4(土)休場 | 入場無料



## EXHIBITION & THEATER

### 1/27(土)~5/6(月)

横尾忠則現代美術館  
横尾忠則 ワーイ!★Y字路  
大学院・横尾忠則 客員教授

### 2/17(土)~5/12(日)

埼玉県立近代美術館  
アブソリュート・チェアーズ  
油画・石田尚志 教授(出品作家)

### 2/27(火)~3/24(日)

山梨県立美術館  
まだ溶けていないほうの山梨県美  
油画・雨宮庸介 非常勤講師

### 3/6(水)~6/3(月)

国立新美術館 企画展示室1E  
遠距離現在 Universal / Remote  
油画・地主麻衣子 非常勤講師  
(出展作家)

### 3/28(木)~3/31(日)

北池袋 新生館シアター  
星歌オムニバスひとりしばい公演「正夢」  
演劇舞踏デザイン・柴幸男 准教授(脚本)

### 3/29(金)~8/12(月)

21\_21 DESIGN SIGHT  
ギャラリー1&2  
未来のかけら: 科学とデザインの実験室

統合デザイン・荒牧悠 講師(参加作家)、プロダクトデザイン・山中俊治 客員教授(ディレクター)

### 5/4(土)~5/18(土)

文学座アトリエ  
アラビアンナイト  
演劇舞踏・加納豊美 教授  
(衣裳デザイン)

### 5/9(木)~5/19(日)

本多劇場  
二人の主人を一度に持つと  
演劇舞踏・加納豊美 教授  
(衣裳デザイン)

## BOOK



書を捨てよ、町へ出よう 復刻版  
横尾忠則 装幀・本文  
レイアウト・イラスト  
(大学院客員教授)  
トゥーヴァージズ  
2023年11月28日刊  
3,960円(税込)



今、絵画について考える  
大島徹也 共著  
(芸術学教授)  
水声社  
2023年12月29日刊  
3,080円(税込)



光と折りの礼拝堂  
田淵諭 著(名誉教授)  
教文館  
2023年11月29日刊  
3,960円(税込)



戦後日本の現代ガラス・私史  
武田厚 著  
(工芸客員教授)  
生活の友社  
1月4日刊  
3,850円(税込)



最新講義  
アフォーダンス  
地球の心理学  
佐々木正人 著(統合  
デザイン客員教授)  
学芸みらい社  
2023年12月4日刊  
2,310円(税込)



柳宗悦の視線革命  
西岡文彦 著  
(名誉教授)  
東京大学出版会  
1月9日刊  
4,950円(税込)



世界でいちばん素敵な文様の教室  
伊藤俊治 監修  
(情報デザイン客員教授)  
三オックス  
2023年12月20日刊  
1,870円(税込)



キリスト教美術をたのしむ  
旧約聖書篇  
金沢百枝 著  
(芸術学教授)  
新潮社  
1月31日刊  
3,850円(税込)



判断の尺度  
alphaプロジェクト  
2022  
高柳恵里 掲載作家・  
執筆者(油画教授)  
武蔵野美術大学出版局  
2023年12月25日刊  
2,200円(税込)



美大の先生と巡る  
世界と地球の建築  
デザインから  
読みなおす歴史と  
環境  
岸本章 著  
(環境デザイン教授)  
彰国社  
2月2日刊  
2,640円(税込)

「TAMABI NEWS」では受賞や活動報告を募集しています。

メール(news@tamabi.ac.jp)あるいは右のQRコード「Activity News 情報投稿フォーム」からお知らせ下さい。



Tama Art University

多摩美術大学 広報誌「TAMABI NEWS」2024年3月20日発行 第32巻 第4号 通巻97号  
発行：多摩美術大学 広報部 東京都八王子市鎌水2-1723 電話:042-676-8611(代表)

